

科目名	クラス	講義区分	科目ナンバリング	曜日	科目名	クラス	講義区分	科目ナンバリング	曜日
国際経済論Ⅱ	<秋>		ECON2655	金2					

【教員氏名】
江川 暁夫

【単位数】
2 単位

【授業形態】
『講義』『実務経験のある教員による授業①』（中央官庁で経済政策の具体的な企画立案を行った者による、実体験を踏まえた授業）『実務経験のある教員による授業②』（外交官経験に基づく実践的な政治経済分析を紹介しながらの授業）

【講義・演習概要】
国際経済論Ⅰでは、モノ・カネ・ヒトの国境を越えた流れが生じる仕組みやそれによる国単位でのメリットを理論的に学ぶ。しかし、現実世界では、国際経済学理論が指し示す通りのことが起こっていないこともしばしばある。その要因の一つに、経済取引を左右する政治的な力学があるということが挙げられる。
国際経済論Ⅱにおいては、同Ⅰで得た知識を踏まえ、国際政治経済学の見地、すなわち理論が指し示すようになっていない理由を政治と経済の相互作用の観点から体系的に紐解いていくことが、主な内容となる。具体的には、
(1) 国際政治経済学の基礎を学んだ上で（第1～4回）、
(2) なぜグローバル化が進まない一方でリージョナル化が進んでいるのかについて、考察を深めることで、経済外交のメカニズムを理解し（第5～9回）、
(3) 実際の世界でも、国内政治のメリットと国際経済のメリットが生じるいくつかの場面を、学習した内容を基に解説していく（第10～15回）

【学習（到達）目標】
(1) 国際経済というトピックそのものについての関心を高め、これにより、経済学を学ぶ国際人となっていく最低限の基礎を養うことができる。
(2) 国際経済の今の姿は政治が大きく関与していること、政治にも国内政治と国際政治という2つの大きな流れがあり、この2つの使い方を間違えると、議論が迷走したり、かえって日本の国益にならないということを知り、より現実的な経済外交について議論ができるようになる。

【講義・演習計画】
第1回：イントロダクション：なぜ、国と国との経済取引関係は単純ではないのか
第2回：国際政治経済学とは①：国際関係論における「経済」の位置付け
第3回：国際政治経済学とは②：国際政治経済学の独特の位置付け
第4回：国際政治経済学とは③：基礎的な理論
第5回：外交力としての経済、開放経済・変動相場制下での他国との経済政策協調の必要性
第6回：グローバル化は不十分だが、リージョナル化が進む世界
第7回：経済のリージョナル化①：単一経済圏、単一通貨圏、単一の経済政策に関する理論
第8回：経済のリージョナル化②：実際にどのような力学でリージョンが作られているのか
第9回：経済のリージョナル化③：自由貿易協定：いたずらな反グローバル化運動がもたらす影響
第10回：現実問題への応用例①：アジア広域の自由貿易圏（F T A A P）構想
第11回：現実問題への応用例②：中国の一带一路構想への日本の対応
第12回：現実問題への応用例③：移民の経済学的意味と政治対立、EUの対応
第13回：現実問題への応用例④：科学技術・情報通信技術と知的財産権の保護と国際経済
第14回：国際政治経済学の現実への応用例⑤：環境問題、排出権取引、気候変動への対応と国際経済
第15回：国際政治経済学の現実への応用例⑥：人権と経済

【成績評価の方法】
試験評価：40% レポート：50% その他：10%
(1) 試験やレポートの採点は、学部2年次の学生が最低限到達すべきレベルを基準とするため、粗点での評価ではない。
(2) レポートの50点については、①毎回、授業の途中ないし終了時に10分程度の小テスト（1回あたり2～4点満点）に取り組み、その点数をレポート点として付加（全体で総合点の30%）、②1、300字程度のレポートが1本（20点満点）。
(3) 出席は必要に応じて取るが、電子的な手法により、スマートフォンによるQRコードの読み取りをしてもらう。必要なアプリ等のインストールは学生自身の責任で準備すること。
(4) 公欠や病欠、就職活動を理由とする欠席の場合は、大学ないし就職活動先が発行する証明書等の書類が提出された場合に限り、出席点の考慮と、当該回の小テストの平均点の加点を行う。

【参考文献】
『国際政治経済学・入門』野村健ほか著、有斐閣アルマ、第3版。
その他、担当教員のこれまでの研究内容について適宜紹介とともに、各回講義に関連する参考文献等は、その都度紹介する。

【事前および事後学習の指示（事前学習 30 時間 事後学習 30 時間）】
事前学習：マクロ経済学あるいは国際関係論を学習することにより、本授業の理解度は飛躍的に高まると考えられる。
また、日頃、新聞の経済欄や経済関係の社説等を読み、経済の議論においてよく用いられている語句を理解するとともに、世界経済の動向に関心を持ち続けることが、授業の理解を促進すると考える。
事後学習：授業では理論を多用する。数式はなるべく使わないが、グラフを用いることがあるため、授業内で解説したグラフの読み方を、なるべく授業の直後に、自分なりに復習することが望まれる。